

近世における江戸の花見処の継承状況に関する研究

A Study on Succession of HANAMI Places in Early Modern Edo

○上野開生¹, 押田佳子²*Kaisei Ueno¹, Keiko Oshida²

Abstract: In this study, I focused on the traditional HANAMI places in edo. As a result, it became clear that succession by distribution and form of HANAMI.

1. 背景及び目的—世界的に類を見ない園芸都市として発展した江戸では、それまで支配階級のものであった花見が大衆化し、当初はツツジやウメをはじめ様々な種を愛でていたことが確認されている。これらの多くはその後、震災や戦災及び近代以降の都市整備等により失われ、現代においては既知の通りサクラが主流となっている。一方で、かつての江戸園芸と花見を文化として保全しようとする動きも一部でみられる^[1]。そこで、本稿では、江戸の伝統的な花見処に着目し、その継承状況を分布及び花見対象より明らかにするものである。

2. 研究方法—本稿では、現在の東京23区内に位置する近世以降の花見処を所在、花見対象より調査した。調査概要をTable1に示す。

3. 結果及び考察—調査より、全89件の花見処^[註1]を抽出した。花見処は、その継承状況より「新規型」「継承型」「変質型」「消滅型」に4分類した。花見処の一覧をTable2に、その分類概要をTable3に、分布状況をFigure1に示す。Table2より、抽出した花見処は新規型が59件、継承型が6件、変質型が13件、消失型が11件あり、近世より継承された花見処は30件程度に留まり、近代以降に創設された花見処が殆どを占めていることが確認された。なお、本稿では、江戸期からの継承実態を探るため、以降は継承型、変質型、消失型の3分類に着目しながら結果及び考察を述べる。

3-1. 継承型—Table2より、継承型は6件であった。Figure1より、「9. 大本山増上寺」など寺社仏閣や、「20. 六義園」など旧大名庭園が多くを占めており、比較的宮城に近い外堀近辺に分布している^{[2][3][4]}。これらは信仰上並びに文化的価値の高さから区画整理等の影響を受けず現代まで継承されたと推察でき、特に近代

以降に大衆に開かれるようになった大名庭園とは異なり、近世以前より庶民の花見処であった寺社では、現代に至るまで対象も変化せず継承されたといえる^[5]。

3-2. 変質型—Table2より、変質型は13件であった。継承型と同じく「15. 浅草寺」などの寺社や、「24. 飛鳥山」など自然地が多く見受けられた^{[2][3][4]}。樹種に着目すると、サクラが6件、ウメが5件、フジが1件であった。Figure1より、分布状況に着目すると、継承型と比較して概ね隅田川近辺や寺社が多く犇めく江戸の郊外地に分布していることが窺える^[4]。そのため、大規模な敷地の確保と庶民への浸透が容易となったと想定される。その結果、後の都市化に際し、敷地規模や需要の高さを踏まえ、公園等に姿を変えながら現在に至るまで継承されたといえる。

3-3. 消失型—Table3より、消失型は11件であり、この多くが「1. 御殿山」や、「2. 日暮里」などの具体的な地点とは異なる周辺地域を表す地名であった^{[4][6][7]}。そのため、花見処自体の所有や境界が明確ではなく、震災や戦災復興並びにその後の都市計画において都市化がなされ消失に至ったと考えられる。樹種に着目すると、ボタンやモモ、キクといった現在においては主流ではない花見処も見受けられたが^{[6][7]}、花見処自体の消失とともにその後の花見の対象としても淘汰されたと考えられる。Figure1より、分布状況に着目すると、基本的に変質型と同様の分布傾向であるが、花見処が私有地や公共空間であることが両者の分類に影響したと推察できる。

4. まとめ—以上より、継承型は江戸の中心である宮殿に近く、継承度合が低いものほど郊外にみられる傾向が捉えられた。これは、近世の江戸の中心部の花見処は文化的価値が高く保全対象となりやすかったのに対し、継承状況の低い花見処の多くは、郊外地の土地所有が曖昧な空間に位置しており、近世には容易に創設出来た花見処が、その後の人口増加に伴う土地利用の需要が増加する中で、改変しやすく変化及び消失し

Table1 Outline of the survey (調査概要) (This is original table by authors)

調査方法	調査対象	調査内容
文献調査	ウォークプラス、 国立国会図書館、他	江戸期から現代までの著名と考えられる花見処を抽出
分布調査	御江戸大江図、 国土地理院地図、他	文献調査で抽出した花見処を各地図上にプロット

1 : 日大理工・学部・まち 2 : 日大理工・教員・まち

ていったといえよう。なお、本稿では、新規花見処については言及しないが、これらは江戸の中心部にも多く分布していることを確認している。今後は新規花見処を含めた全分類に着目して調査を進める予定である。

5. 注釈・参考文献

【注釈】

[注1] 1つの花見処において複数の花見対象を示す場合が複数含まれる

【参考文献】

[1] 文京区生物多様性地域戦略, www.city.bunkyo.lg.jp (閲覧日 2020/4/25~5/2) [2] ウォーカープラス, http://www.walkerplus.com (閲覧日 2020/4/20~5/3) [3] 地理院地図, https://maps.gsi.go.jp (開

覧日 2020/5/2~5/23) [4] こちずライブラリ, 「江戸寺社名庭園付録御江戸大絵図」, 2014 [5] 小野佐和子, 「花見における民衆の変身と笑いについて—幕末江戸住民のレクリエーションの一形態—」, 1984 [6] 歌川広重, 「江戸名所百景」, 1858 [7] 斎藤月岑, 「江戸名所図会」, 1836

Table3 Outline of the classification (分類概要) (This is original table by authors)

分類	記号	概要
新規型	◎	明治期以降に創設された花見場
継承型	○	江戸期までに創設され、そのままの形で現在に至るまで継承されている花見場
変質型	△	江戸期までに創設され、名称や規模の変化を経て現在まで継承されている花見場
消失型	×	江戸期までに創設されたが、時代の変化に伴い消滅し、現存していない花見場

Table2 A table of the HANAMI places (花見処の一覧)

番号	名称	分類	樹種	番号	名称	分類	樹種
1	御殿山(現北品川)	×	サクラ	31	靖国神社	◎	サクラ
2	日暮里	×	サクラ	32	都立芝公園	◎	サクラ
3	団子坂上	×	サクラ	33	中央公園	◎	サクラ
4	団子坂上	×	キク	34	清澄庭園	◎	サクラ
5	洗足池	△	サクラ	35	旧岩崎庭園	◎	サクラ
6	池上本門寺	○	サクラ	36	千鳥ヶ淵	◎	サクラ
7	法明寺	○	サクラ	37	日比谷公園	◎	サクラ
8	湯島神社(現湯島天満宮)	△	ウメ	38	哲学堂公園	◎	サクラ
9	大本山 増上寺	○	サクラ	39	新宿御苑	◎	サクラ
10	神田神社	○	サクラ	40	旧古河庭園	◎	サクラ
11	寛永寺(現上野恩賜公園)	△	サクラ	41	明治神宮外苑	◎	サクラ
12	不忍池	△	サクラ	42	加賀公園周辺	◎	サクラ
13	不忍池	△	ウメ	43	桜坂	◎	サクラ
14	小石川後楽園	○	サクラ	44	旧浜離宮恩賜庭園	◎	サクラ
15	浅草寺	△	サクラ	45	としまえん	◎	サクラ
16	浅草奥山(現新奥山)	×	サクラ	46	外濠公園	◎	サクラ
17	新吉原	×	サクラ	47	目黒川	◎	サクラ
18	亀戸天満宮(現亀戸天神社)	△	フジ	48	墨田区立錦糸公園	◎	サクラ
19	亀戸天満宮(現亀戸天神社)	△	ウメ	49	墨田公園	◎	サクラ
20	六義園	○	サクラ	50	蘆花恒春園	◎	サクラ
21	隅田堤(現墨堤通り)	△	サクラ	51	浜離宮恩賜庭園	◎	サクラ
22	亀戸梅屋敷	×	ウメ	52	ホテル椿山荘東京	◎	サクラ
23	桃園	×	モモ	53	グランドプリンスホテル	◎	サクラ
24	飛鳥山(現飛鳥山公園)	△	サクラ	54	戸山公園	◎	サクラ
25	新梅屋敷(現向島百花園)	△	ウメ	55	八重洲さくら通り	◎	サクラ
26	新梅屋敷(現向島百花園)	△	サクラ	56	砦公園	◎	サクラ
27	梅屋敷(現蒲田梅屋敷公園)	△	ウメ	57	石神井公園	◎	サクラ
28	目黒新富士	×	サクラ	58	播磨坂さくら並木	◎	サクラ
29	花屋敷	×	ボタン	59	ホテルニューオータニ	◎	サクラ
30	花屋敷	×	キク	60	善福寺川緑地・和田堀公園	◎	サクラ

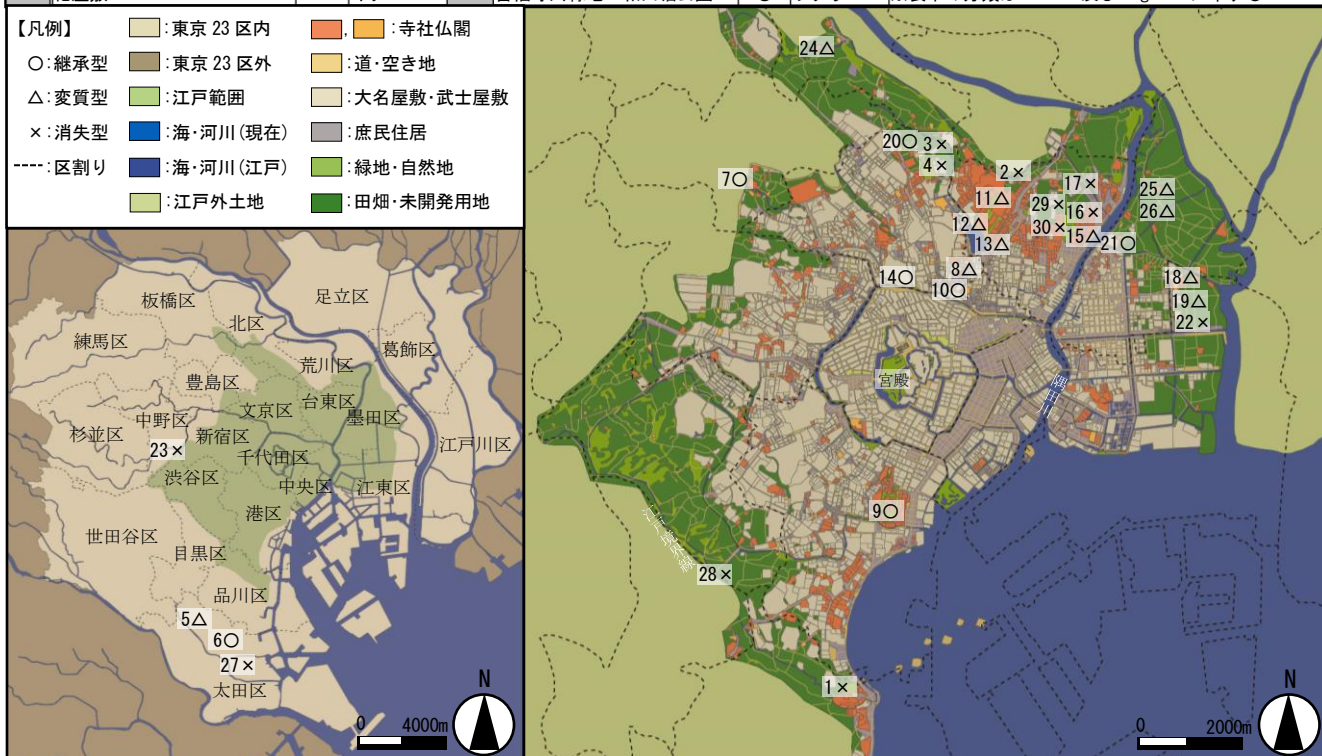


Figure1 Distribution situation(分布状況)